

暗いのスレ

奥野忠昭

その日の午後、授業を終え、慌てて放課後の仕事を済ませると、警察の生活安全課を訪れた。五分刈りで白髪交じりの警官が現れ、さげすむような微笑みを浮かべながら俺に向かって言った。

「これは誘拐とか、連れ去りとか、そういった事件性のある事案ではありませんよ。家の金を持ち出しているんでしょう。間違いなく家出です。もちろん管内はもとより隣接する警察には写真を送り、こういう二人づれの小学生を見つけたら、保護してくれと連絡してあります。昨夜は、市の公園をすべて巡回し、今朝は駅の改札にも、捜査員を張り付けていますし、全力を尽くしていますから。安心してください。事件性のないものにこれだけのことをするのは異例のことなんですよ。市議の強い要望があったもので。こんなのは慌てても仕方ありません。金がなくなれば必ず帰ってきますから」

市議とは元PTA会長だった人に違いない。校長が頼んだのだろう。

「はあ、ありがとうございます。迷惑をおかけして申し訳ありません」

俺は礼を言いながら、頼まれたから仕方なくおぎなりの捜査をしているのではないかと考えた。

昨夜、自分の捜したところを言い、「行きそうなところは他に考えられませんか」と尋ねた。

「それって、あなたたちの方がよく知っているはずですよ。子どもを扱う専門家なんだか

ら

皮肉っぽい言い方だ。親や学校が日頃からしっかり指導していればこんなことは起こらないのに、といった批判じみた態度も見て取れた。

「そう心配しなくても、金がなくなったら帰ってきますよ」とまた言った。

それは警察といえども見つけられないと言っているようなものだ。

たとえ事件性がなくても、失踪中に何らかのトラブルに巻き込まれないともかぎらない。
い。

以前、夜遅くまでいっしょに連れ立って町をうろついていた小学生の男女が異常性格者の車に言葉巧みに乗せられ、二人とも殺された事件があった。

これはやはり、俺たち教師が、いや学級担任の俺が一刻も早く見つけ出さなければならぬ。警察を頼っている取り返しをつかないことになりかねない。

「何度も言うようだが、金がなくなったら必ず帰ってきますから、安心して待っていてください。まったく驚きましたよ。最近は小学六年生でも家出をするんですから。昔は高校生でもちらほらだったのに」と警官が付け加えた。まるで世間話をしているような雰囲気になった。

「わかりました。ではよろしく願います」そう言おうとした途端、また喉が痛み、声が裏返って咳が出た。

「お疲れのようですね。体を大事にしてくださいよ。情報が入ったら、すぐにお知らせしますから」

「ありがとうございます。よろしく……お願い……します」と声を詰まらせながら頭を下げた。

確かに美音（★びね）はお年玉を貯めたお金を全部持ち出しているそうだ。もちろん。

栄夫（★えいお）は施設から通っている子どもなので、自由に使える金などないはずだ。だから、彼らはそう金は持っていない。すでになくなっているかもしれない。金がなくなれば帰ってくるどころか、悪事に走るかもしれない。あるいは悪い奴らと出会うかもしれない。待つてなどいられるものか。

学校は市議に頼み、警察が念入りな捜査をすると約束してくれたのだから、義務を果たしたと考え、後はすべて警察に任せている。

ああ、喉が痛む。日頃、授業中の私語を抑えようと大声を出し続けてきたためだろうか。声を出せば痛みが走る。声を出さなければ授業が進まず学級崩壊する。それに、すでに栄夫と美音が失踪した。俺の学級が問題学級とされ、俺の評価はがた落ちだ。父母の評価が落ちれば必ずそれを反映して子どもたちの信頼感も落ちる。学級崩壊の基となる。

俺はサッカーボールを校庭の端から端まで高々と蹴り上げ、子どもたちを驚かせることができない。鉄棒をつかんで、何度も回転して見せることもできない。子どもに、はやっているアニメの歌をピアノでうまく弾き、歌手のように歌ってみせることもできない。トランプカードで、あっと思わせる手品もできない。そろばんを頭に描き、多くの計算を即座にやってのけることもできない。これらができれば、先生はすごいと感心させ、子どもたちの尊敬を得ることができ、うちの先生はすごいと親たちに誇らしげに言うだろう。親たちも担任を尊敬する。それらのできない俺は、子どもに声をかけたり、授業に工夫を凝らしたりして興味を起こさせるようにしなければならない。しかし、それを完璧にしようと思えば準備のために多くの時間が必要。だが時間の取りようがない。だから毎時間、理

想的な授業などできっこない。つい知識の強制的な伝達に終わってしまう。子どもたちはたまったものではない。皆、横を向き、私語をしてしまう。

小学校では原則、全教科を担当が持つ。音楽の授業ではピアノを自由に弾けなければならぬ。家庭科では料理を上手にできなければならない。体育では泳ぐ模範を示さなくてはならない。また種々のスポーツやダンスも。図工科では絵や工作の技術も、さらには理・算・社・国では天文学や物理学や化学や生物学や数学や社会学や国語学や文芸学などの基礎知識が必要だ。加えて道徳や生活指導や給食指導まで。

教えるには教えられる人の何十倍もの知識や技能が必要だと言われている。さらに、知識を持っていても、うまく教える技術が必要だ。しかも一人に教えるのではなく、集団を相手に教えるのだ。だが、どう教えるかについては大学ではほとんど教えない。しかも就職すれば学ぶ時間などない。学んだところで必要な教具を準備する時間がない。

何ヶ月前「教師としてちゃんとやれなくてごめんなさい」という遺書を残して、新任女性教師が自死したことがテレビで報道された。彼女は夜中まで教材作りをしていたそう
だ。

俺はすでに十数年もの経験を持つ。だのに授業にはまったく心許ない。慣れによる幾ばくかの技や知識は持っているが、それだけでは不十分だ。

精神を病んで休職や退職をした教師が年々増え、全国で六千人を遙かに超えているとか。その中でも小学校の教師がダントツに多い。中学校の二倍以上だ。俺だっていつ何時、そうならないともかぎらない。背筋に冷気が走り、また咳が出そうだ。

最近、教育学部を卒業しても、教師にならない学生が急増している。公務員はいいが、

学校の先生にだけは絶対にならないで欲しいと親が娘に懇願しているようだ。学校はブラック企業だと若者たちが言っているらしい。

しかし、いったん教師になった以上、働き続けねばならない。教師はつぶしがきかないと言われていた。転職の当てなどない。ただ、いい面もある。それは教師は一国一城の主(★あるじ)などところがあり、自分の裁量でいろんなことができる。授業方法だって自由だ。直接指図してくる上司もない。

だからこそ俺が自主的に「失踪した二人」を捜さねばならないのだ。

昨夜の九時半を回った頃、生活指導担当の矢島から電話がかかり、美音と栄夫が帰ってこない、すぐに警察に来てほしいと言ってきた。

警察に行くと、学校側からは校長と矢島、美音の父と母、施設からは施設長と栄夫担当の職員、警察からは生活安全課の課長が集まっていた。

美音の父母は、めばしいところにはすべて電話を掛けたと告げた。担任の俺は彼らから二人に何かおかしなところがなかったかと、何度も尋ねられた。いくら考えても見つからないので、おかしなところがなかったと告げると、彼らの表情には明らかに俺に対する非難の匂いが漂っていた。まるで俺が悪事でもしたような。

昨日は日曜日で、美音は、午前中、中学校受験用の塾へ行き、昼食を済ませると、午後には、塾の宿題の問題集をやり、その後、水泳教室へ行き、帰ってきて夕飯を済ませると、家でピアノの練習をしてから、ピアノ教室へ行った。

美音の母親が異変に気づいたのが午後八時過ぎで、ピアノ教室へは歩くと二十分以上かかるので帰りはいつも車で迎えに行き、駐車場に止めて待っているのだが、いっこうに

現れないので、先生のところへ尋ねに行くと、出席していたがいつものように帰ったということだった。友だちといっしょに歩いて帰ったのかと思って、家に戻ったところ、いつまでたっても帰ってこない。それで、友だちや親類などに電話をかけて尋ねてみたが皆知らないと言い、それで警察に伝え、学校長にも伝えたそうだ。

栄夫の方は、朝食後、朝の清掃の時間、下級生を指導して受け持ちを丁寧に掃除をし、その後、学校の宿題や、図書館から借りてきた本を熱心に読んでいたそうだ。午後には食事の後片付けを手伝った後、サッカーの練習をし、夕飯の手伝いもし、自由時間では、テレビでサッカーの試合を見ていたが、夜の点呼のときに、彼が見当たらず、いつの間にかいなくなっていたそうだ。彼が出て行くのを見たものはないということだった。

施設の方もよく生じる無断外出かと思ひ、彼の場合、近くにたいへんなついていた祖母がいたので、ひよっとしてそこに行ったのかと思ひ、電話を掛けたが来ておらず、それで搜索願いでも出そうかと考え、警察へ来たところ、同級の美音も帰ってこないということがわかった。また、施設内を調べたところ、野外学習で使う寝袋が三つなくなっているとのことだった。

とりあえず皆で手分けして捜そうということになり、俺と矢島は校区はもちろん、市全体の遊び場所を捜すように命じられた。ただ、夜の十二時を過ぎても見つからなかったらいったん捜すのを打ち切り、家に帰るようにと命じられた。警察は校区はもちろん市全体の公園を見て回るといい、父母や施設長はさらにめぼしいところに電話をかけたり、捜査協力を頼むということだった。

俺らは夜遅くまでやっている遊び場所、例えばゲームセンター、パチンコ店、マンガ喫

茶、カラオケ店、コンビニなどを捜し回ったが見つからず、十二時を過ぎたので家に帰った。床についたが、寝付かれず、うとうとしただけで、目が覚め、早々と学校へ出勤した。

俺が朝の出席をとっていて、栄夫と美音が欠席しているのを知った級友のひとりが、今朝早く、父親とジョギングをしているとき、美音と栄夫がいっしょにいるところを見ましたと伝えた。こんな早い朝、いっしょに何をするのかと思ったそうだ。そのことを校長に言い、親にも告げた。

これで、二人が行動を共にしていることがはっきりした。と同時に昨夜は近くで寝ていたこともわかった。ひよつとして友人の家にでも泊めてもらったのか。いや、めぼしいところにはすべて連絡をしたと美音の親が言っていた。では、いったいどこで野宿したのか。見つけだすこともできず、情けなかった。さらに、いったい彼らは何のために日曜日の夜に家出をしたのかさえ思いつかない。

俺は、栄夫らを探すのを止め、耳鼻咽喉科の医院に来て、喉の治療という私的な用事に時間を費やしていた。必死に彼らを探さなければならぬ時に、なぜ、こんなところへ来てしまったのか。

今しがたまで、ひよつとして彼らがそこに行きそうに思い、ゲームセンターを再び訪れ、店長や、常連の客に写真を見せ、小学生の二人連れがこなかったかと尋ね、さらに人気のアニメをやっている映画館にも行き、入場者の切符を確かめている人に同じことを尋ねたが、来ていないと言い、次に、アニメの人形を売っている店に行こうとして、ふと、道路

を駆け抜ける微風と、すでに力を失った柿色の陽光に包まれたとき、なんだか失神しそうになり、しばらく二人のことを忘れた。

するとこの医院のことが思い浮かんできた。医師から二日に一度は通院するようにと言われていたのだ。それがまったくできていない。さらに教材作りのできなかった今日の授業はひどかった。私語が多く、それで大声を出したために喉がひどく痛んだ。これ以上、喉を痛めつけるとどうなるか。声を失うかもしれない。なのに、病院に通うこともできない。二人が失踪する事件の前だって忙しくて診察時間になかなかこれなかった。俺は自分の身体に追い詰められている。

この土曜日には、ある子どもが万引きで捕まり、親ともどもスーパーに謝りに行き、その後は、親の子育てに何か問題がなかったかを話し合った。それで、夕方の診察時間に間に合わなかった。さらにその前日には、書かせた試験の採点に時間をとられ、照美との約束を断らなければならなかった。さらにその前前日には学年会議が長引き、その前前日にも何かのつびきならない用事があったように思う。

そう思った途端、空咳が出て、喉の奥が裏返り、肺胞がはみ出そうだった。

早く治療し、良くしなければ取り返しをつかないことになる。そんな思いが強まり、思わず行きつけの医院に駆け込んだのだ。

中に入り、空いた椅子に座り、前を向くと正面にはテレビがあり、五分間のニュースをやっていた。国会が始まり、小泉純一郎の国会演説の様子が映し出されていた。「構造改革なくして景気回復なし」と声高にしゃべっている。また、大リーグに移籍したイチロー選手が開幕から三割をキープし、ホームランも打ったと報じていたが、俺にはなんの興味

もわからず、ただ何となく辺りを見渡した。テレビのすぐ横の椅子に隣のクラスにいる勝野の母親がいた。彼女が俺に気づくと、座ったまま、頭を軽く下げた。俺も微笑みを浮かべながらそれに応じた。途端、相手にも聞こえるほどに心臓の鼓動が鳴った。最悪だ。以前、隣のクラス担任の前田が、担任の子どもを病院に見舞いに行くところを見つかり、「まだ、子どもと関われる時間なのに学校を出て、街をうろついている教師がいる」と教育委員会へ怒鳴り込みに行った親だ。「クラスの子どもが鉄棒から落ちて怪我をし、入院したので見舞いに行く途中だった」と弁解しても、納得せず「見舞いは夜行くもので、昼に行くものではない」などと言ったそうだ。

彼女が立ち上がり、俺に近づいてきて何か言おうとした途端、「勝野さん」と呼ばれた。「先生も大変ですわね。二人も子どもがいなくなつて」と皮肉っぽく言うど慌てて診察室へ走り込んだ。すでにもう隣のクラスの親たちにまで広がっているのだ。なんと速いことか。

「まだ、五時にもなっていないうちに、もう病院に通っている教師がいる、そんなことを校長先生、許可されているのですか」とまた怒鳴り込みに行く恐れがある。こんな教師が担任だから、失踪するような子どもが出てくる、と思つたに違いない。もし、教育委員会にでも行けば、教育委員会から、校長に「君の学校は親との信頼関係ができていないね。早急に何らかの手を打ちなさい」と言ってくるに違いない。今度は校長が我々に「行政が学校選択制さえ考え出している昨今、悪い噂を立てられては困る。それが出来ないようにすることが地域への貢献というものだ。私は、何も自分への評価を恐れているのではない。地域の学校を悪く思わせたくないのだ。ぜひ、親との信頼関係を築くように。そのために

は、就業時間が終わるまでは学校から出ないように。街に用事があるときは、五時以降にしてくれ」と言うだろう。こうしているいろいろな制限が我々に向けられる。しかし、これも致し方のないことだ。俺は納得している。俺は教師なのだ。

勝野の母親に見つけられた以上、もうジタバタしても仕方がない。俺自身だって、この時間、二人を捜し回らねばならないと思っていたのだから、勝野の母親が俺を攻めるのも無理はない。

「でも」という己(★おのれ)の音がする。「でも、これが済んだら、すぐに隣の市の公園や、漫画喫茶にまで回るつもりだ。これって、医院に来た時間の穴埋めにならないのか。加えて喉をいかれたのは授業で大声を出したからだ。公務による病気なのだ。それを治療するのに、就業時間を使って何が悪い」

そう考えて少しほっとした。途端にまた別の音がする。「今は緊急事態だ、教師にはそんな理屈は通用しない。教師は普通の労働者とは違う。親の立場から考えてみよ。一刻も早く見つけ出してほしいはずだ。教師は子どもの奉仕者なのだ。聖職といわれている」

と、突然耳元で大声がした。

「何度もお呼びしました。わからなかったのですか。すぐに診察室へ行ってください」
若い女性の看護師が痴漢にでもあったような顔つきで俺を見ている。

「ええっ、私を呼んだって」

「そうですよ。何度も何度も」

彼女は俺をからかっているのか。

「こんなに近くで呼んでも、何の返事もなされないんですもの。きっと耳がお悪いのかと思っ
て、そっと手を差し伸べようとしたら犬が歯をむき出したような顔をなさって私をに
らみつけるんですもの、怖くって」

「どうしたの、早く患者さんを連れてきて」

診療室から、老練な看護師の声がした。

「はい。さあ早く行きましょう」

何かを考えていたからだろうか。慌てて診察室に走り込んだ。

「この方、近くで何度呼んでも、聞こえなかったのです」若い看護師がよほど不思議なこ
とでも起こったように言った。

「いや、いつも騒音の中にいるものですから、耳も悪くなっているかもしれません」と俺
は口走った。

「耳も見てみようか」

医師は細長い棒の先に電灯が付いた器具を近づけ中を覗き込んだ。

耳を診てもらおうなどとは思いつかなかったのに。

「外見上ではどこも悪くないな。こんなことよく起こるの」

「今度が初めてです」

「突発性難聴かもしれないよ。何度でも起こるようだったら、一度聴力検査をしてみよう。

ひよっとして、心療内科へ行ってもらってもいいかもしれないよ」

突発性難聴。そんな病気があるのか、絶対に違う、ただ、考え事をしていただけだ。喉

だけではなく、耳までやられてたまるものか。

「学級の子が失踪したって、それが引き金になったのかもしれないね」と医師が単調な声でつづけた。

勝野の母親がしゃべったのだ。「次の患者さん、学校の先生で、今、学級の二人の子が失踪しているんです。だのにここに来ているんです。あの先生、どこかお悪いんですかとでも言ったのだ。

すると、今度は、病院にいることを忘れ、栄夫と美音のことが思い浮かぶ。

かなり以前のことだが放課後、職員室で採点をしていた。成績が芳しくなく、教え方がまずかったのかと思った。このまま次に進んでいいのだろうか。しかし、前田の学級はすでにこの単元は一週間ほど前に終了したという。やり直す時間はない。どうするかを考えていた。

「前田先生の学級、教え方がうまいのか、どんどん進んでいくのに、私たちの学級、遅れている。うちの子ども、嘆いていた」という親の声がする。

と、職員室の扉の開く音がして、背の高い一人の児童が慌てるように入ってきた。詩織だった。詩織は成績もよくスポーツも上手で、学級では人気者だ。俺のところまで来ると小声で言った。

「栄夫君が美音さんをいじめています。私、美音さんの靴を隠しているところを見ました。美音さんの靴、私、知っています。黄色い紐で結ばれていたから」

「何処に」

「四年二組の靴入れに。私が六年三組の部屋へ行くと美音さんが困惑したように、靴箱の前に立っていました。靴がないのと聞くと、軽く頷きました」

「そうか、ありがとう」

「あの二人、何かよく話しています。きつと栄夫君が美音さんをいじめているのと違いますか。栄夫君のいじめをやめさせてください。美音さんがかわいそう」

それだけ言うと、お辞儀をしてすぐ出ていった。

俺は慌てて四年二組の靴入れの前に行った。そこにはもう誰もいなかったが、黄色い紐の靴があった。それで、六年三組の教室の前に行くと、栄夫と美音が何か話し合っていた。俺が近づくの気づいて、二人は緊張しながらこちらを向いた。雰囲気 がらっと変わった。

「どうした」と言うと、二人とも困ったような表情をした。

「靴がないのかな」と尋ねた。

「はい」と美音が驚いたような顔をしながら答えた。

「栄夫、お前が隠したのと違うか」と言うと「はい」と小さな声で答えた。

とうとう俺のクラスにもいじめが始まったのかと、戸惑いと悲しみが一気に襲ってきた。いじめが生じたとき、いったいどうしたらいいのか、解決方法がわからない。陰湿で見えない場合が多い。だが、見抜くのも学級担任の仕事だ。また見抜いたとしても、どうしたらいいのかわからない。いじめる側の親にそれを伝えれば、親のプライドを傷つけ、親としての自信が砕け、うろたえて、うちの子はいじめなどするはずがない。ただ、ふざけていただけだと思えば、怒りを学級担任や学校に向けてくる。さらに、皆に知れ渡れば、いじめを抑えきれない無能教師と呼ばれかねない。だから隠そうとする。「学級崩壊、いじめ」などの大きな問題は一人で抱え込まないで、まずは学校全体で解決すべきものと

言われている。しかし、建前はそうだが、壁が多すぎる。第一、他の学級のことなど考える余裕などない。

栄夫は「施設」から通ってきている子どもだ。両親を交通事故で亡くしている。成績は中間より少し上といったところだが、友だちのことをよく考える子だ。真面目で大人しい。施設の先生の評価もよかった。栄夫がそんなことをするはずがないと思うが、「靴を隠した」という事実がそれを崩した。

「栄夫、職員室へちょっと来てくれるか」俺は出来るだけ冷静を装って静かに言った。

「栄夫君が悪くありません」と美音が突然大声を出した。

栄夫がすでに職員室に向かって歩き出しているのを、美音が彼の上着の端を握ってはなさない。

俺は正直ほっとした。栄夫を連れて行ったところで美音をいじめていたとは言わないだろうし、彼の言うことを信じなければ、栄夫との関係が悪くなる。それに、これが美音の防御策かもしれない。これで、栄夫に恩を売り、いじめをやめさせようとしているのかもしれない。しかし、もし、栄夫が美音をいじているのなら。簡単に解決するものではない。今、無理に彼を職員室に連れて行くのは拙速ではないか。

「そうか、隠された人がそういうのなら、栄夫の考えを聞くまでもないな」

俺がそう言い、事件を一応終わらせた。

偶然だが、そうしたことがよかった。しばらくして詩織が「先生、ごめん、あれは栄夫が美音をいじめていたのではなく、お互いに靴を隠し合って、見つけあう遊びをしていたんだって」と息をハアハア言わせながら言いに来た。

だが、今、あの事件を思い出すと、苦い思いがする。栄夫と美音とは仲良しだったのだ。なのに、すぐに詩織の言葉を信じ、栄夫を少し疑ったことが悔やまれた。でも、今でも栄夫を百パーセント信じているわけではない。ひょっとして、栄夫が美音をそそのかし、連れ出したのかもしれないという想いがある。美音の母親はさかんにそう言っていた。

施設では以前「とんこ（脱走のこと）」がよく起こったそうだ。今はめったに起こらないとも聞いたが、ただし根が残っているはずだ。だが、栄夫がいなくなって施設の先生方も驚き、ショックを受けていると言っていた。あの子が「とんこ」するとはどうしても思えない、と何度も言った。俺もそう思う。少しでも栄夫を疑う気持ちがあることを恥じるべきだ。しかし、なぜ、二人がそろって家出をしたのか。ひょっとして美音が「受験、受験、いい学校へ、そして将来はお医者さんに」という生活にストレスがたまり、嫌気がさしたのか。栄夫が美音に同情したのか。

そんなことを考えていると、医師が細長いナイフに似た金属を舌の上のせ、舌を押さえつけて中を覗き込んだ。

「ううん、かなり赤らんで少し腫れているね。以前よりも赤いよ。そうだな。出来るだけ大声を出さないように。しばらく、ほぼ無言で過ごすのが一番だが、それはできないか。少なくとも、できる限り声を出さないように。それに前にも言ったが、二日に一回は吸入しに来てくれないと。薬を出しておくが、それで直らないようだったら、咽頭ファイバースコープの検査をするから、二日にいっぺんは吸入に来て、二週間後には詳しく見て判断するから」と言い、さらに「今日は吸入をしてから帰って」とも、言った。

「こちらへどうぞ」と、看護師が医師から離れるように促した。

俺が大声を出さなかったら、授業をどのように進めればいいのか、明日も授業がある。もうこの場所に座り込みたかった。

医院を出たところで俺と同じぐらいの年齢のハンチング帽を被った男が近づいてきた。俺もハンチング帽を被っていた。あいにく街灯の下で顔が頭の影と帽子の鏝でよく見えなかった。

男と目が合った。俺が思わずお辞儀をした。担任の生徒の父親かもしれないと思ったからだ。それにこの男も医院にいたように思う。

「あなたも喉がやられたのですかね」と男が言った。

頷いた。

「喉頭癌ではないかと心配しているのですか。今はまだ心配はいりませんよ。大声を出すぎているのと、ストレスが原因の、ただの喉の炎症ですよ。しかし、ストレスの元は一つ、あなたがそれに気づいていない。気づかないと喉の病気も耳の病気も、もつと悪くなるでしょうね。そうなったら危ない。耳も聞こえなくなり、しゃべることもできなくなる」

男は薄ら笑いをしながら言った。

「元って」

「それはあなたが見つけたことです」

「俺は一生懸命、教師の仕事に取り組んでいる、学級担任として恥ずかしくない教師を目指して」

「そうです。それは認めます。でも……。自殺した女性の教師のこと、知っていますか。」

彼女もそう思っていたみたいですよ」

「知っていますよ。テレビ放送され、ショックを受けました。でも、俺と彼女を比べるのは間違っていますよ。俺はそれほど弱くはないし、すでに十数年のキャリアもある。立派な教師とは言われなかったが、それなりにやってきましたから」

「それはそうです。でもあなたはそれに不満なのだ。だから彼女のようにならないとは限りません。可能性がありますよ。ああ、そうだ。先ほど、警察へ行ったとき、警官の言葉聞いてあなたはどう思われました？」

「おざなりだ、まかしてはおけんと、だから俺が捜さねばならないと」

「確かにあなたならそう思うでしょうね。それが危ないのだが、その他には？」

「それが危ない？ なぜ？ その他にはとは？」

「警官の言葉を聞いたときに思ったこと、他にもあるでしょう」

「ほっとしたよ。確かに、絶対に大丈夫、帰ってくると警官が保証したのだから。でもね、それは瞬間的で、悪い仲間に捕まりでもしたらと気が気ではなかった」

「それも認めます。でも、もっと他のことを思ったはず。でもそれへの注目をあえてしなかった、だから思い出せない」

「もっと他のこと、ああ、俺は明日も授業をしなければならぬ。しっかり身体を休めないと、このままではいい授業や生徒への対応ができない。それがもとで学級崩壊になりかねないぞと。あるいは、他の教師はさっさと家に帰っているのに、なぜ俺だけが……。いや違う。俺はそんなけちな人間ではない。かなり疲れてはいるが」

「ああ、いい線行きかけているのだが」

「ええっ。それに俺は誰かに強制されて、彼らを捜している訳ではない。自主的にだ」

「自主的にね。自殺した教師も、誰かに強制されて遅くまで教材作りや、授業の工夫をしていた訳ではありませんよ。自主的にやっていたのです。その自主的が危ない。多くの精神を病んだ教師は、確かにモンスターペアレントに悩まされていた者もいたが、みんながみんなそうではないよ。多くは自主的にやっていたのだ」

これではまるで俺が「精神をやられる教師」の道を歩んでいるようではないか。

この男は何者だ。俺は忙しい。すでに日が落ちている。奴らを捜す前に、照美と会って、事の次第を納得させなければならぬ。照美は「今日は会えない。会える日は追って知らせる」などで、もう納得する状況ではない。約束を破ることが多すぎる。「私と会うのが負担になってきたのかなあ、私との熱が冷めたということか」などと思いはじめたいへんなことだ。俺は早く会いたいのだ。毎日でも会いたい。

「では忙しいので、私はこれで」

俺はさっと男から去った。十メートルは駆け足で歩き、後ろを振り向くと、男は何処へ行ったのか、姿はなかった。

即刻照美に会いにいかねば。子どもを捜しに行っていたら照美を失うかもしれない。あんないい女、他の男が放っておくはずがない。げんに「こんな手紙が来たのよ」と彼女が俺の知らない男からの手紙を見せた。「自分と付き合ってくれ」という趣旨のものだ。どう返事したかと聞いた。「もちろんそんな気がまったくないと断ったわ」と笑いながら答えた。ほっとはしたが、俺よりいい男やいい状況の男はごまんという。放っておいてはだめだ。早く会わねば。五時以降は照美のことを優先して何が悪い。

あつ、これは警察にいたときに強く思ったことだ。

コンクリートでできた一戸建て市営住宅の前に来た。彼女の家は学区内にあり、一戸建ての家が三十戸以上群れをなして建てられている。だからこの群れからもかなりの子どもが俺の学校へ来ている。

彼女も公務員だが県立の図書館に勤めている。

呼び鈴を鳴らし、照美が扉を開け、「ようやくこれたの、無理したのでしょうか。食事はまだ？ いっしょに食べよう」と即座に言った。俺は今まで食事のことは忘れていた。どうしよう。家に入り、食事をとるとなると時間がかかる。だめだ。しかし、もし俺のための用意をしてくれていたら、彼女の行為をないがしろにすることになる。彼女を傷付けてしまう。

「俺のも作ってくれたの」

「もちろん」

ううん、と自然と声が出てしまった。彼女と食事をしようと決めていたのに。

「忙しいんでしょう。子どもを捜すんでしょう。だったら付き合うわ。食事はその後もいいよ、そうしてあるから」

「ええ、いいの？ おそくなるよ」

「大丈夫よ。それとも足手まとい？」

「うれしいよ、ぜひ、いっしょに捜して。良いアイデアを聞けるかもしれないから」

俺はしばらく彼女の顔を見続けた。よく気をつく最高の女性だ。彼女を置いて他に俺の

伴侶はいない。結婚したい。俺は何度も結婚しようと言ったのだが、照美の方が「そう急がなくても」とか「ううん、まあね」とか言って応じない。何か俺のことをさぐっているのか。

いや、今、そんなことを考えるときではない。しかし「付き合う」とはいつしよに連れだつて歩くということだ。そんなところを学級の親にでも見つかればどう言われるだろうか。

またも嫌な思いが出てくる。「女の人と散歩しているのよ。学級の子どもが出奔しているというのに、呑気なものね。親御さんの気持ち思わないのかしら。よくそんなことできるわ」などと。

俺は親を悪くとらえすぎているのだろうか。もつと親を信頼すべきか。だが、親を敵と思っているのは俺だけではないぞ。多くの教師がそう思っている。それは決してそら言ではないし、大げさなことでもない。事実なのだ。

以前、親しくしていた同僚の妻が他の男性と恋に陥り、離婚した。すると、それを聞いた親たちは「家庭をちゃんと守れないような先生に教えてもらいたくない」と言い、教育委員会へ大挙して押しかけ、ついに担任の教師は鬱病になり、休職せざるを得なくなった。さらに復職後は、家とはかなり離れた学校へ転勤させられた。

また、最近、一年生を担当する女性教師が長い髪を黄色に染めて、ジーンズをはいて登校してきた。口紅も以前よりは濃かった。背の高い彼女は外国の映画俳優のように格好よかった。皆はウオーと歓声を上げた。大勢の子どもたちが彼女を見るために職員室へ押しかけ、「キヤー、ワー」とか驚きの声を上げた。彼女は音楽が得意で、気の合う仲間

とアマチュアバンドをやっているらしく、今度、いくつかのバンドが組んで、ライブをやるらしい。そのために髪を染めたのだ。俺はクレームがつくだろうと思った。案の定、校長室に呼ばれ、髪を丸くまとめ、スカーフで覆うように言われたそうだ。しかし、彼女は髪を丸めはしたものの決してスカーフで覆わなかった。

それから二日後、校長に逆らうように二人の教師が髪を染めてきた。俺はうれしかった。だが、その日の朝礼で、校長は職員室の前方の、誰が書いたのか知らないが、墨で達筆に書かれた「其の身正しければ命ぜずして行われ、その身正しからざれば、命ずとも従われず（孔子）」という垂れ紙を指さして「我々は子どもたちに華美な服装をしないよう命じている。我々の服装や髪の色も教師として恥ずかしくない、模範となるようなものになければならない」と力説した。俺は微笑みながら、逆読みした。「命ぜずして行われるものはみな正しい」と。

また、校長は「学校の帰りにパチンコをしている先生がいるらしい。クレームが入っている。パチンコをしてはいけないとは言わないが、校区から遠く離れたところでやってほしい。ゲーム・センターへ行くお金をくれ、先生だてパチンコをしている、と子どもが言うらしい」と言った。

そんなことを考えている間に、照美はすでに俺の腕をつかんで歩き出した。

いっしょに探すと言ったって、付近の場所を探すのだ。二人が野宿することを選んだ場合、土地勘のあるところに決まっている。栄夫が施設から寝袋を三つ持ち出している。三つとはどういうことかわからないが、ひとつは、床に引くためか。

施設では何度か、テントで夜を過ごす練習をしたそうだ。野宿する方法を知っている。

それに、昼間には寝袋を何処かのロッカーにでも入れておき、夜にそれを引き出せばいい。

二人は昼は遠くへ行っても、夜には校区近くへ帰ってきているはずだ。それに美音が金を持ち出したとしても、そう高額ではない。食事や遊びに使ったらすぐなくなるほどだ。

遊びに行った先でホテルに泊まれるほどの金は持っていない。それに小学生だけでホテルに行けば、保護されるに違いない。また、漫画喫茶があるが、土地勘がなければどこにあるのかわからない。近郊の店には昨夜すでに捜しに行き、もし訪れたら連絡してくれるように言っている。

さしあたり栄夫たちがキャンプの練習をしたという公園へ行ってみようと思いついた。

あの公園は隣の市のものだが、ここからそう遠くはない。照美にそれを告げ、歩きだした。あそこには東屋ふうの休憩所があり、野宿するにはもってこいだ。時々ホームレスも寝ていた。

踏切のところまでやってきた。あいにく列車通過の合図がなり、遮断機が下りた。この線路を境にして校区が違うが、踏切から少し行ったところに大きなスーパーがあり、校区のお母さんたちはそこで買い物をしている。夕方八時頃まであいている。

遮断機の上がるのを待ってぼんやり立っていると向こうに自分のクラスの吉田と峰岸の母親が買い物袋を下げて立っていた。いやな人間に会うなと思った。途端に、照美が俺の頬を両手でつかみ顔を彼女の方を向かせ、俺に顔を近づけてきた。だめだクラスの親が見ている、と言おうとしたが、俺の唇が自然に彼女の唇を吸い始め、両手が彼女を強く抱いた。踏切の両側には街灯があつて俺たちをスポットライトのように照らしている。だが、

俺は照美を離さない。

列車が轟音をたててやってきた。音に刺激されたように、彼女の唇に俺のを強く当てながらも、無粋にも職員室に貼ってある「其の身、正しければ命ぜずして行われ、其の身正しからざれば、命ずとも従われず（孔子）」という垂れ紙を思い出した。と同時にその垂れ紙が無性に腹がった。遮断機が上がったのに関わらず、垂れ紙を思い続けながら、照美を抱き続け、唇を離さなかった。ちらっと目を横に向けると、向こうから人々が横を通り過ぎた。吉田と峰岸の親もこちらを見ながら、通り過ぎたに違いない。かまうものか、悪く言うやつは死ね、とっとと死ね、と何度も思った。

ようやく照美を放したとき、「どうしたの」と彼女は微笑みながら言った。「いやあ」と照れ笑いをしながら「ああ、ちょっと寄りたところを思いついたんだ。行ってくれるか」と尋ねた。「いいよ」と照美が言い、俺たちは今来た道をとって返した。

学校へは簡単に入れた。地域と学校は連携すべきで、運動場などは地域に開放せよという政府や自治体の方針で、校舎も貴重な物のある部屋にのみ施錠していたが、そうでない部屋へは自由に入れた。もしもそれで、変なことが起これば学校は完全に扉で囲まれるだろう。そんなことがなければいいのだが。

職員室は施錠されていたが、持っている鍵で扉を開け、横の柱にあるスイッチを押すと多くの蛍光灯が一斉についた。机が向かい合わせで二列に並んでいて、その上には書類が山積みされ、書籍などが立てかけてあった。今日の午後三時半ごろまでここにいたのに何だか懐かしい。この感覚、自分でもわからなかった。

「職員室って、案外乱雑」と照美が言い、珍しそうに辺りを見回している。

「まだこれで、よく整理されている方だよ。期末になるともっとひどくなる」と言う。

俺は部屋の前方に行き、教頭の椅子の背もたれを前壁に引っ付け、椅子の上に乗った。

壁にピンで留められている「其の身、正しければ命ぜずして行われ、……（孔子）」と

書かれた垂れ紙を力一杯引きちぎると、ピンが落ち、垂れ紙が俺の手から垂れた。その

隣の「児童を愛（★いとお）しみ、慈（★いつく）しむこと父母のごとし（西村茂

樹）」も同じように下に落とされた。

椅子を元に戻すと落ちたピンを拾い、下方の壁に八つ並べて刺しておいた。それから、

「俺は親でも聖人でもない。ただの普通の人間さ」と何度も心の中で叫びながら、二つの

垂れ紙を足で踏んづけ、さらに拾い上げると、「ええい、ええい」と、力任せに引き裂い

た。照美は大声をあげて笑い出した。

床に散らばった紙片を拾い集めて、丸め、ズボンのポケットにしまい込んだ。すると身

が少し軽くなった。と同時に、自分の教室へも行ってみたくなくなった。学校へ来るとまず教

室へ行くのが習性になっているためだろうか。今の今まで、教室のことなど頭に浮かばな

かったのに。いや、習性などではなく、照美に俺の活動場所を見せたくなくなったのだ。それ

で、「俺の教室を見に行く？」と彼女に尋ねると照美はうれしそうに頷いた。

六年の教室は二階にある。トンネルのような暗い廊下を歩き、階段を上り、二階につい

た。廊下の突き当たりの方を見ると少し明るい。

ああ、俺の教室の前が明るい。しまった。今日、電気のスイッチを切るのを忘れたのか。

そんなはずがない。それに、もし忘れたとしても、最後に校務員さんが校舎を見回わって

くれる。だから、消してくれているはずだ。また、人の声のような音が断続的に聞こえて

くる。

「何か声が聞こえないか」と後ろを付いてくる照美に小声で尋ねた。

「ああ、あの部屋、誰かいるよ」

音を立てないようにそっと教室に近づいた。六年三組という小さな黒塗りの看板が壁から突き出ているところで立ち止まった。

部屋のガラス障子が開けられていて、中が少し見えた。慌てて後ろを振りかえり、ゆっくり歩いてくる照美に、人差し指を唇にあて、声や音をたてないように合図した。照美も意味がわかったらしく、足音を消した。

何人かの頭や背中が見え、さらに同じ高さの机が長方形に並べられ、かなりひろい平面ができていて、その上に体育用のマットが二枚、敷かれていた。さらにマットの上に寝袋が三つ転がっている。

「おい、ここで何をしている」とすぐに飛び出し、怒鳴りたくなるのを押さえながら、彼らに見られないように注意し、さらに奥を覗いた。

マットの奥には栄夫の平べったい顔と鼻筋の通って大人びた美音の顔があった。横には学級委員長の信也の顔も見えた。慌てて顔を引っ込め、身体を壁にくっつけた。

昨夜、栄夫も美音もここに泊まったのだ。美音は、昨日、夜のピアノ教室へ行っていたが、それが終わると家には帰らず、ここへやってきたに違いない。栄夫もまた、施設から抜け出してここへ。

「お金、明日の分も大丈夫か」と信也の声が聞こえた。

「大丈夫」美音の透き通った声。

明日もどこかへ行くつもりらしい。

「皆、たくさんお金出してくれて、ありがとう。よかった」これは詩織だ。

「お年玉のお金、たくさん貯金してたから」誰かの声。

「デイズニー、よかったよ、おもしろかった」栄夫の声。

「超よかった。ありがとう」美音の声。

「これで、クラス全員、デイズニーへ行けたわけだよ。皆でデイズニーのこと話せるよ」

これはやや大人びた学級委員長・信也の声だ。

「勝った、勝った。俺らの組、一番や。一組は一人、二組は三人もまだ行ってないらしい」

クラス一番のやんちゃな総一郎の声だ。

「競争してんのと違うわ」詩織が反発する。

「私、塾のお金に、お年玉を使われているから、出すのが一番少なくてごめん」美音がつづける。

「美音は難関の中学を受験するので何処にも連れていってもらえないんだね。毎日、塾に行ってるし、土、日は、塾だけではなく、水泳教室やピアノ教室にも通っているんだから」

これは詩織の声かな。

「私、塾に行くのはいいけど、少しは遊びたいし、テストもあって、成績順が親に知らされ、いつも叱られるのがいや」

「栄夫は、ときどき面会に来てくれるオバンからお小遣い貰って、貯めてたんやね」総一郎。

栄夫は施設から通っている子だ。栄夫は一銭も出さなかったのだろうと思っていたのが

間違いだった。きっと施設ではお金を使えなかったのだ。いや、使わなかったのだ。お金をもらえていない子がたくさんいるから。それに、面会者が子どもにお金を渡すのは厳禁されているはず。

「昨日、信也君が泊まってくれてよかったよ。二人より三人のほうが心強いもの」美音の声。

さらに続けて、「それにここに泊まってよかった。母は早起きだし。もし出るのが見つかったら、すべてがだめになるもの」

「僕も同じ。寝坊だから、信也君が起こしてくれると思ったら、心配せずに眠れたし」栄夫の声。

「間に合ったの。初発の新幹線に」詩織の声。

「ええ、バッチリ」美音が答える。

「今日の当番、総一郎だね、頑張れよ、総一郎。怖い怖いといって泣くなよ」誰かが言った。

笑い声が窓から炎のように漏れてくる。どうも、学級委員全員が集まっているらしい。

俺のクラスは、問題が生ずれば学級委員で話し合い、案を「終わりの会」に提案して皆の意見をまとめるという方法をとっている。だが、この計画を「終わりの会」に提出すれば俺にばれる。俺が止めるに違いない。計画はおじゃんになる。

彼らはどこからも止められないためには委員だけで極秘に行う必要があった。さらに、大人たちに叱られるというリスクを承知の上で。また、家出しなくてもこの計画が可能だったかもしれないのに、あえて家出したのも他に理由があったかもしれない。例えば親

や施設への反発とか。とにかく、家出の全貌がこれでわかった。

それにしても、野宿の場所が教室とは誰も気づかなかった。考えてみれば、彼らが一番野宿しやすいところは教室だったのだ。子どもの思考をいかに大人がわかっていないか。

さらに、彼らの計画力や行動力には驚いた。すごい。大人たちに迷惑をかける、後からは必ず叱られる。それを承知の上でやったのだ。それへの対処の仕方まで考えているはずだ。完全な確信犯。

突然「この調子で明日もやろうぜ、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」と総一郎が高揚した声をあげた。と「オー」と多くの声が呼応した。ひととき高く美音の声もあった。

美音も栄夫もまだユニバーサル・スタジオ・ジャパンへは行っていないのだ。

あっ、ちょっと待てよ。なんと鈍感だったことか。俺は、今、ひとつ重大な決断を迫られている。

これから教室の中へ踏み込めば、今日の野宿や明日の計画は中止され、美音も栄夫を速やかに親や施設に届けられる。親や教師はほっとするだろう。皆から「よく教室だとわかったね」と思われ、さすが学級担任だと褒められる。いや逆かもしれない。前もってなぜ子どもたちの計画を察知できなかったのか、鈍感な教師だと罵られるかもしれない。親もまた俺たちを敵と思っているようだから。

今、子どもたちの前に現れるべきか。それとも、そっと彼らから離れるべきか。

もし俺がここから立ち去り、彼らの誰かが俺が覗いていたことに気づいていて、何らかの理由で管理職や保護者にでもばれたら「彼らを見つけておきながら、それを放置した」と責められ、ただの「勧告」程度の処罰では済まないだろう。さらには、保護者から猛烈

な反発を受けるだろう。ではどうするか。

俺は、考えながらも無意識に一步後ろに下がった。どうしても中に踏み込めない。

彼らの用意周到な計画を思うと、それを邪魔するには忍びない。彼らの計画を完遂させてやりたい。これは父母や保護者では考えられないことだ。教師だからこそできる。

後ろを振りかえると、照美は俺の気持を察したのか軽く頷いた。

俺は音をたてないように細心の注意を払いながら、照美とともにそこを離れた。

この様子だと学級崩壊は当分ないだろう。俺にもこんなことができるのかと、自分でも驚いた。まさか、教頭の後ろにはってあったあの紙を破ったためではないだろうなあ。

二人はしばらく無言で歩いた。

学校を出たところで、照美は突然立ち止まり、俺をじっと眺め、微笑みながら言った。

「そろそろ結婚のこと、考えてもいいかな」と。

了